



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
京都大学医学部人間健康科学科



京都大学医学研究科・医学部創立125周年 記念式典の様子（2025年7月実施）

目 次

○専攻長・学科長メッセージ	青山 朋樹	… 2	看護科学コース	市原 香織	…18
○医学研究科・医学部創立125周年記念式典・祝賀会		… 3	リハビリテーション科学コース	牛 茜	…19
○退任挨拶			先端リハビリテーション科学コース	松本 杏美莉	…19
元先端看護科学コース 講師	細川 陸也	… 5	リハビリテーション科学コース	田中 浩基	…20
元先端看護科学コース 助教	平 和也	… 5	先端リハビリテーション科学コース	中原 峻	…20
元先端看護科学コース 助教	鳥井 美江	… 6	検査技術科学コース	中西 加代子	…21
元総合医療科学コース 助教	榛葉 旭恒	… 6	総合医療科学コース	SAIZONOU OMOLOTO MARIE	
元先端リハビリテーション科学コース 特定助教	八木 優英	… 7		ANGE JOELLE	…21
○新任挨拶			看護科学コース	片寄 亮	…22
先端看護科学コース 准教授	山下 正	… 8	看護科学コース	小清水 宏	…23
先端作業療法学講座 准教授	川島 啓嗣	… 8	先端リハビリテーション科学コース	趙 梓汐	…23
総合医療科学コース 准教授	中川 直樹	… 9	先端リハビリテーション科学コース	吉岡 クレモンズ紀徳	…24
先端看護科学コース 助教	岩井 直子	… 9	先端リハビリテーション科学コース	王 紫敏	…25
先端看護科学コース 助教	初治 沙矢香	…10	先端リハビリテーション科学コース	清水 博己	…25
総合医療科学コース 助教	東 克暁	…10	先端リハビリテーション科学コース	徐 仕軒	…26
総合医療科学コース 助教	藤井 瀬菜	…11	先端リハビリテーション科学コース	大塚 日花里	…26
先端看護科学コース 特定助教	前田 樹	…11	リハビリテーション科学コース	下出 優	…27
先端作業療法学講座 特定助教	山田 晶子	…12	○入試、修了・卒業者数		…28
○第34回健康科学市民公開講座報告書		…13	○卒業生の進路調査結果		…31
○2024年度オープンキャンパス		…15	○人事異動		…32
○新規博士		…16	○日 誌		…34
看護科学コース	浅瀬 万里子	…18	○あとがき		…35



専攻長・学科長メッセージ

青山 朋樹

2025年はウクライナ/ロシア戦争、イスラエルのガザ侵攻に続いて、インド/パキスタン紛争、イスラエル/イラン紛争など、世界中でヒトとヒトが争う事態が広がっております。もっともこれは2025年に始まったわけではなく、地政・経済的な不安定さや気候の変動、民族主義の台頭などによって、一部の政治家のみならず、世界中の多くのヒト達の不安が攻撃性に転化しつつあることが影響しているのかもしれません。

交感神経と副交感神経の間の自律神経バランスが崩れ、交感神経が優位の際に攻撃性が増すことはよく知られています。今年の解剖実習では交感神経と副交感神経に注目して、学生達と注意深く観察を行いました。脊椎の横に軍列しながら整然と並ぶ交感神経幹に対して、副交感神経は脳幹から迷走神経として、仙髄からは仙髄神経として分岐し、長い距離を経由して胸腹部の臓器や組織に到達します。この神経の走行だけを見ていると、脊髄からダイレクトに働く交感神経に対して、長い距離を経由する副交感神経は影響力が弱いように思えます。

人間健康科学科ではヒトが健康であるための術を学びます。その一環として声掛け、環境調整、エクササイズ、作業活動、生活リズムを律することなどの手法によって自律神経をコントロールする術を識ることができます。健康であることは誰もが願うことなので、ダイレクトではないものの、理知的に、心の中に染み入るようにして、心に落ち着きを取り戻すことが可能な術です。私たち、人間健康科学科が紛争の仲裁、地政の悪化や環境変化に歯止めをかけることはできませんが、そういった健康行動を広げていくことは、遠回りではあるものの意外に効果的ではないでしょうか。

さて、人間健康科学科では2025年度入試で2年次高専編入学を開始しました。4月よりこれまでの一括入試、特色入試、2年次学士入試の入学生に混じって、勉学に励んでおります。いまのところ、どの入試で入学した学生かの見分けはできませんが、これまでと違った新しい風を吹き込んでくれることでしょう。

まあ、私の個人的な課題は、授業において学生たちの寝かしつけにならないように、交感神経をいっぱいにして奮闘する毎日ですが。

京都大学医学研究科・医学部 創立125周年記念式典および祝賀会

令和7年7月12日（土）、京都ブライトンホテルにて、京都大学医学研究科・医学部創立125周年記念式典および祝賀会が盛大に開催されました。

この記念行事は、本学医学研究科・医学部が、明治32（1899）年に京都帝国大学医科大学として創立されてから125周年を迎えたことを記念して挙行されました。

人間健康科学科は、明治32（1899）年9月に、その前身である京都帝国大学医科大学附属医院看護婦見習講習科として設置され、昭和50（1975）年4月には、京都大学医療技術短期大学部として京都大学に併設されました。こうした経緯を経て、医学研究科人間健康科学系専攻および医学部人間健康科学科も、令和6（2024）年に医学研究科・医学部、医学部附属病院とともに、創立125周年を迎えました。

記念式典では、伊佐正医学研究科長による式辞に続き、湊長博京都大学総長の総長挨拶、奥野真文部科学省大臣官房審議官、夜久均京都府立医科大学長、坂井義治芝蘭会常務理事、宮島朝子名誉教授（人間健康科学）、藤原真治医学部校友会会長より、心温まるご祝辞を賜りました。

続いて、湊総長をはじめ、伊藤淳史先生（文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター助教）、諸岡健雄先生（PHコンサルティング合同会社代表社員）、河野優子先生（カリフォルニア大学サンディエゴ校 消化器肝臓内科臨床教授、放射線科臨床教授）、レシャード・カレッド先生（医療法人社団健祉会 理事長、レシャード医院 院長、アフガニスタン復興支援NPOカレーズの会 理事長）による記念講演が行われました。



式辞を述べる伊佐研究科長



祝辞を述べる宮島名誉教授

講演後には、ラウンドテーブル形式によるディスカッションが実施されました。伊佐研究科長の下、諸岡先生、河野先生、レシャード先生、栴島健治教授（皮膚科学）、斎藤通紀教授（機能微細形態学）、柳田素子教授（腎臓内科学）、波多野悦朗教授（肝胆膵・移植外科学、次期研究科長）により、これからの京都大学医学研究科・医学部の目指す姿について、活発な意見交換が行われました。

祝賀会では、伊佐研究科長および井村裕夫京都大学元総長によるご挨拶の後、高折晃史医学部附属病院長の乾杯のご発声により開宴となりました。歓談の中、河本宏医生物学研究所長、高橋淳IPS細胞研究所長、成宮周名誉教授、波多野次期研究科長によるスピーチが行われ、京都大学交響楽団による演奏が華を添えました。最後に、今中雄一副研究科長の閉会のご挨拶をもって、盛会のうちに幕を閉じました。



祝賀会の様子



退職のご挨拶

元先端看護科学コース 講師 細川 陸也

このたび2025年3月末日をもちまして、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしました。これまで賜りました温かいご指導とご厚情に、心より御礼申し上げます。なお、4月より、京都府立医科大学大学院保健看護学研究科に着任し、これまでと同様に保健師課程の教育に従事しております。

2020年4月に先端看護科学コースに着任して以来、5年間在籍させていただきました。新型コロナウイルス感染症の影響を受けた大学教育においては、数々の新しい試みが求められ、試行錯誤を重ねながら教育実践に取り組んでまいりました。困難も多くございましたが、それらの経験は、新たな教育手法を学ぶ貴重な機会となりました。多くの先生方より賜りましたご指導とご支援に、改めて深く感謝申し上げます。

また、大学院教育では、修士課程および博士後期課程の主旨導教員として、大学院生の指導に携わることができたことも、私にとって大きな学びとなりました。現在、担当させていただいている大学院生につきましては、奥野教授の研究室に在籍させていただき、委託指導という形で指導を継続しております。修士課程1名、博士後期課程4名の大学院生が、それぞれ無事に修了できるよう、引き続き責任を持って取り組んでまいり所存です。今後とも、諸先生方にはご指導・ご鞭撻を賜ることもあるかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら、皆様のご健康と益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。



退職のご挨拶

元先端看護科学コース 助教 平 和也

2025年3月末日を持ちまして、京都大学を退職し、4月より大阪大学量子情報・量子生命研究センター特任准教授として勤務させていただいております。

私は、2020年4月に先端看護科学コースの助教として着任し、保健師課程の教育業務をしながら、保健・医療・福祉政策の評価指標のデジタル化や生成AIの看護領域での活用方法の模索、コロナ禍での保健所職員の就業実態調査や保健師の需給の推計など幅広い研究に携わらせていただきました。現職では、関西に量子コンピュータの拠点をつくることを目指し、人材育成担当として勉強会の運営、学生や民間企業の職員で構成されたコンソーシアムの形成及び量子ソフトウェアのユースケースの探索などの業務を行っています。新たに学ぶことも多く、刺激的な日々を送っておりますが、量子技術と医療や看護の橋渡しができる人材になれるように日々精進していく所存ですので、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

末筆ではございますが、人間健康科学科の皆様のご健勝と益々のご発展をお祈り申し上げます。



退職のご挨拶

元先端看護科学コース 助教 鳥井 美江

2025年5月末日をもちまして、京都大学を退職し、6月より奈良県立医科大学医学部看護学科成人慢性期看護学分野教授として勤務させていただいております。

2013年に京都大学学際融合教育推進センター（LIMS）に着任し、2016年からは先端看護科学講座在宅医療・認知症学に異動し、約12年間にわたり在宅看護教育、地域看護学教育に携わらせていただきました。これらの経験は、現在従事している成人慢性期看護学の教育・研究にも大いに活かされております。研究面においては、医学研究科免疫・膠原病内科、リウマチセンター、社会健康医学系専攻の先生方のご協力を得て関節リウマチ、全身性エリテマトーデスのコホート研究の実施、筋炎患者の新規コホートの立ち上げなど、自己免疫疾患領域におけるサルコペニアやフレイルに関する研究に取り組む機会をいただきました。その成果の一部として、京都大学たちばな賞奨励賞を賜りましたことも、心より感謝申し上げます。また、在職中には3度の出産を経験し、育児と教育・研究の両立に奮闘いたしましたが、ロールモデルとなる先生方の励ましや、共同研究者・同僚の皆様の温かいご支援、そして京都大学の制度的サポートにより、研究者としての歩みを止めることなく続けることができました。あらためて深く御礼申し上げます。今後も京都大学には研究員、非常勤講師として在籍し、研究・教育に携わらせていただく予定です。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ではございますが、人間健康科学系専攻の皆様のご健勝と益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

退職のご挨拶

元総合医療科学コース 助教 榛葉 旭恒

2024年7月末をもちまして、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職し、8月から京都大学医学研究科附属がん免疫総合研究センターに勤務させていただいております。

私は、2019年8月より総合医療科学コース助教に着任し、5年間在籍させていただきました。その間、免疫学における基礎研究に従事しながら、学生実習や研究指導にも携わらせていただきました。コロナ禍もあり、授業や実習で対面とオンラインが入り混じる体制の中、いかに学生のまなびに貢献できるかコースの先生方と相談していたことが懐かしく感じます。コースの中でお役に立てる場面が限られておりましたが、それでも温かいご指導とサポートをいただき、深く感謝しております。

現職においても引き続き京都大学に所属しており、医学研究に携わり研鑽を積んでおりますので、共同研究など人間健康科学系専攻の先生方と協働できれば大変嬉しく思います。これからもご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、皆様のご健勝と益々のご発展を心より祈念申し上げます。



退職のご挨拶

元先端リハビリテーション科学コース 特定助教 八木 優英

2025年3月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職し、4月より関西医科大学リハビリテーション学部に講師として着任いたしました。

2021年4月の着任以来、委員会活動等で人間健康科学系専攻に貢献する機会に限られておりましたが、多岐にわたりご指導を賜り、誠にありがとうございました。予防理学療法学講座および先端理学療法学講座では、運動器理学療法分野の研究に携わるとともに、大学院生の教育や研究指導に関わらせていただきました。将来、理学療法分野を牽引していくであろう学生たちと共に学び、その成長に関わることができましたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。これもひとえに、各講座の先生方、研究室の皆様、ならびに事務職員の皆様の温かいご支援の賜物と存じます。

現在勤務しております関西医科大学リハビリテーション学部では、第1期生がこの3月に卒業し、大学院修士課程が4月に新設されたばかりです。京都大学での経験と学びを活かし、学生教育と運動器理学療法分野の研究に尽力していく所存です。今後とも何らかの形で皆様と一緒できる機会がございましたら、大変嬉しく存じます。

末筆ながら、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻のますますのご発展と、皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



着任のご挨拶

先端看護科学コース 准教授 山下 正

2024年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端看護科学コース地域健康創造看護学分野の准教授を拝命いたしました。この場をお借りして、着任のご挨拶を申し上げます。これまで私は、行政機関にて保健師として従事した後、神戸大学大学院にて国際保健学および公衆衛生学を学び、神戸市看護大学公衆衛生看護学分野において教育・研究に携わってまいりました。教育面では、保健師の養成を使命とし、個別支援に必要な公衆衛生看護技術の育成や、地域診断を通じて地域全体への予防的アプローチを担える人材の育成に取り組んでまいりました。研究面では、行政の保健師と連携した地域住民の健康課題の実態や要因の分析に加え、フィリピン共和国をフィールドとする公衆衛生学的課題の解決、ならびに在日ベトナム人が抱える健康課題に関する研究にも取り組んでおります。このたび、京都大学という歴史と伝統ある学府において教育・研究の機会を得られましたことを、大変光栄に存じます。今後は、学部生および大学院生の育成に尽力するとともに、現場との連携を重視し、人々の健康の向上に寄与する実践的かつ理論的な研究に、初心を忘れず誠心誠意努めてまいります。引き続き、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

先端作業療法学講座 准教授 川島 啓嗣

2025年4月より、人間健康科学系専攻先端リハビリテーション科学コース先端作業療法学講座の准教授に着任いたしました。この場をお借りしまして、皆様に着任のご挨拶を申し上げます。

私は、滋賀医科大学を卒業後、本学医学部附属病院精神科神経科、公立豊岡病院組合立豊岡病院で精神科医としての臨床経験を積んで参りました。臨床においては、電気けいれん療法を専門とし、重症精神疾患の診療に取り組むとともに、精神科リエゾンチームにおいては、せん妄を中心として一般診療科に入院されている患者さんの診療にも従事してまいりました。本講座では、前任の谷向先生と同様に、附属病院の緩和医療科での診療を行うとともに、上記の経験を活かした教育および研究に鋭意取り組んで参りたいと思っております。

実際に赴任して、本専攻の多くの先生からお声がけをいただき、温かく迎えていただき、大変ありがたく思っております。多様なバックグラウンドを持った先生方との交流は私にとって大変刺激的で貴重なものと感じております。この環境を活かして、自分自身の視野を広げ、今後の活動に活かしていくとともに、私自身も、このコミュニティに少しでも貢献ができるように、精一杯努力していきたいと思っております。

諸々ご迷惑をおかけすることもあるかもしれませんが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

総合医療科学コース 准教授 中川 直樹

2024年10月1日付けで、人間健康科学系専攻総合医療科学コース基礎系医療科学講座分子生命基礎医療科学分野の准教授に着任いたしました。この場をお借りして、皆さまに着任のご挨拶を申し上げます。

私は本学医学部保健学科検査技術科学専攻（現・人間健康科学科総合医療科学コース）を卒業し、本専攻で博士号を取得しました。その後、米国ノースカロライナ大学医学部、国立遺伝学研究所での研究教育活動を経て、ご縁があり教員として本専攻に戻って参りました。研究面では、脳・神経回路の形成を担う分子・細胞メカニズムの理解を目指して、マウスをモデルとして研究を行っております。胎児期と発達期を通して精緻な神経回路が形成される仕組みと、その仕組みの破綻が精神神経疾患の病態や加齢による認知機能低下にどのように繋がるかに興味を持っております。教育面では、生化学概論、および分子細胞生物学の講義と実習を担当しております。身体の正常な働きや疾患で生じる変化を、「分子」「細胞」といったミクロな視点から理解できる人材の育成を目標として本学での教育研究活動に努めたいと考えております。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

先端看護科学コース 助教 岩井 直子

2025年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端看護科学コース先端広域看護科学講座地域健康創造看護学分野の助教に着任いたしました、岩井直子と申します。この場をお借りして、着任のご挨拶を申し上げます。

私は岡山大学医学部保健学科看護学専攻を卒業後、同大学院博士前期課程を修了し、岡山県にて保健師として6年間、行政実務に携わってまいりました。その後、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程に進学し、2017年に博士課程修了後は、京都大学医学部附属病院小児科において研究員として勤務し、7年間にわたり、医師主導の臨床研究支援業務および小児がん看護に関する研究活動に従事してまいりました。研究テーマとしては、小児がんサバイバーの長期フォローアップ、エンド・オブ・ライフケアなどに取り組んでおります。

このたび、京都大学において臨床・教育・研究に携わるという大変貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。これまでの保健師としての行政実務経験や臨床研究支援の実績を生かし、地域健康創造看護学の発展に寄与するとともに、看護学教育の充実と次世代を担う看護職の育成に尽力する所存です。

まだまだ未熟ではございますが、人間健康科学系専攻の皆様におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

先端看護科学コース 助教 初治 沙矢香

このたびご縁をいただき、2025年4月1日より、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻生活環境看護学分野の助教に着任いたしました初治（ういじ）沙矢香と申します。この場をお借りして、皆様に着任のご挨拶を申し上げます。

私は2013年度に本学人間健康科学科看護学専攻を卒業後、京都大学医学部附属病院にて看護師として臨床経験を積み、2019年度より本学大学院生活環境看護学分野の修士課程・博士後期課程に進学し、研究に取り組んでまいりました。大学院では若村智子教授のご指導のもと、ヒトの体内時計に関する研究を進めており、特に交代制勤務者の健康・パフォーマンスや子どもの睡眠に関するテーマに重点を置いています。交代制勤務に関する研究は、私自身の臨床経験とも深く結びついており、不規則な時間帯に働く医療従事者の健康維持や支援体制の構築に資する知見を生み出すことを目指しております。

着任から約3か月が経過しましたが、先生方や学生との関わりの中かで多くの刺激と学びをいただいております。母校という馴染みのある環境で、教員としての第一歩を踏み出せたことを嬉しく、また心強く感じています。立場が変わった今、本学の教育や研究にこれまでとは異なる視点で触れられることに新鮮さと成長の機会を日々感じております。

未熟ではありますが、学生一人ひとりの主体的な学びを支援し、臨床と研究の両面に通じた視野を育む教育に努めてまいります。そして、微力ながら本学のさらなる発展と社会への貢献に向け、誠心誠意取り組んでまいります。ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

総合医療科学コース 助教 東 克暁

2024年10月1日付で、人間健康科学系専攻総合医療科学コースに助教として着任いたしました東克暁と申します。この場をお借りして、着任のご挨拶を申し上げます。

私は早稲田大学を卒業後、本学薬学研究科にて修士課程を修了し、師事していた野中先生のご栄転を契機に本専攻の博士後期課程へと進学、2024年3月に博士号を取得しました。その後、野中研究室で研究員として研究を続け、このたび現職に至りました。これまでは、分子進化工学的手法を基盤として、疾患の新規治療法や診断法に繋がる基礎研究を行ってまいりました。

現在は、生化学や分子生物学、細胞生物学、臨床化学など、分子や細胞に関わる講義や実習を担当しております。臨床検査の現場での検査結果をミクロな視点からより深く理解し、生体内で起こる現象と正しく結びつけて解釈した上で、臨床検査や研究に携わることのできる人材の育成に努めてまいります。

未熟な点も多々あるかと存じますが、学生時代よりご指導いただいた経験を少しでも本専攻に関わる皆様方へ還元できるよう、教育・研究の両面で貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

総合医療科学コース 助教 藤井 瀬菜

2024年10月1日付で京都大学医学部人間健康科学科総合医療科学コースに助教として着任いたしました藤井瀬菜と申します。着任のご挨拶の機会をいただきありがとうございます。

私は京都大学医学研究科人間健康科学系専攻にて修士課程を修了したのち、京都府立医科大学附属病院にて臨床検査技師として輸血・細胞医療に携わりました。また、病院に勤務する傍ら、京都大学医学研究科人間健康科学系専攻にて博士号を取得しました。その後、医療機器メーカーにおいて検査試薬の開発職に従事し、現在に至ります。

これまでに、臨床現場、検査試薬開発、基礎研究と広く経験を積ませていただきました。今後はこれらの経験を活かし、臨床につながる形で基礎研究を発展させていけるよう、日々研鑽を重ねていく所存です。そして、総合医療科学コースで基礎医学や臨床検査を学ぶ皆さんが、広い視野を持ってこの領域での学びを深めていけるよう支援することを目指しております。

本専攻の先生方には今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

先端看護科学コース 特定助教 前田 樹

2025年4月1日付で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻大規模医学AI講座の特定助教に着任いたしました前田樹と申します。この場をお借りして、着任のご挨拶申し上げます。

私は2025年3月に奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科において博士の学位を取得いたしました。大学院では、化学と情報科学の融合分野であるケモインフォマティクス（Chemoinformatics）を専門とし、とりわけ創薬への応用に取り組んでまいりました。具体的には、膨大な化合物ライブラリの中から医薬品候補となる分子を効率的に探索する手法の開発に従事しておりました。分子をコンピュータ上でいかに表現・記述するかに注目し、分子表現の改良によって探索モデルの性能向上を目指して研究を進めてまいりました。

本学における研究では、化合物情報に加えて標的となるタンパク質の情報も活用し、AI技術を用いた次世代の医薬品設計に貢献したいと考えております。また、教員として学生の皆さんの成長を支えることも大きな使命と捉えております。京都大学の恵まれた環境を活かして、研究・教育の両面から人間健康科学系専攻のさらなる発展に貢献できるよう、日々精進してまいります。今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



着任のご挨拶

先端作業療法学講座 特定助教 山田 晶子

2024年11月1日付で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻先端作業療法学講座の特定助教として着任いたしました山田晶子と申します。

群馬大学医学部を卒業後、小児科・精神科での勤務を経て、京都市児童福祉センター診療所等で児童精神科医として臨床に従事してまいりました。また、2021年からは京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座（精神医学講座）の博士課程に在籍し、研究活動を行ってきました。

このたび、社会課題解決を目指して2024年度に設置された「SMBC京大スタジオ」の取り組みの一環として、株式会社日本総合研究所との共同研究「発達障害特性がある人材の就労における能力発揮支援」に従事することとなりました。神経発達症特性のある方たちが能力を発揮し、社会で活躍できるよう、研究成果を支援体制の整備、普及・啓発活動へとつなげていきたいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

第34回健康科学市民公開講座報告書

令和6年度 学術委員会委員長 先端理学療法学講座 山口 智史

令和7年2月9日（日）に健康科学市民公開講座を対面形式で開催しました。今回は、「モチベーションを高める-運動を継続するためのやる気の上げ方-」をテーマに、リハビリテーション分野におけるモチベーション研究に取り組まれている浜松医科大学の田中悟志先生と東京家政大学の鈴木誠先生に、モチベーションを高めるための最新知見をわかりやすくご講演いただきました。



会場の様子

アイスブレイク



アイスブレイク

アイスブレイクでは、講演内容に関する○×形式のクイズを10問出題し、参加者が考えるモチベーションを高める方法を解答していただきました。正解が提示されると、考えていた解答とは異なっていることに驚きながら、講演への期待感を高められていました。

講演1：続けられる運動の秘訣 -患者さんと専門家の声からわかったこと-

田中悟志先生は、心理学分野を専門として、リハビリテーション現場で研究活動に取り組まれています。講演では、運動を継続できない理由として、時間的な壁、心理的な壁、環境的な壁、習慣化の壁があることが説明されました。これらに対して、家族などは、尊重する、話を聴く、やる気の言葉を逃さず称賛することが重要であること。また本人は、『まずやってみる』、『明確な目標を立てる』、『生活と結びつける』が重要であることが紹介されました。



田中先生

講演2：行動制御の法則からモチベーションを考える



鈴木先生

鈴木誠先生は、作業療法士として、生活に関する行動を改善するための研究に取り組まれています。講演では、人間の行動は環境との相互作用によって生まれるという視点から、リハビリテーションにおけるモチベーションを高める重要性を解説いただきました。「やる気がない」という言葉で片付けるのではなく、行動の背景にある環境要因（先行刺激、後続刺激）を分析することの重要性を説明いただきました。

Q&A

最後に、15分ほどの時間で質疑応答を行いました。多くの質問が会場から寄せられ、講師の先生方から、一つ一つ丁寧に回答いただきました。



Q&A

今回は、前日の雪の影響があり、参加者の減少が心配されましたが、64名の方にご参加いただきました。参加者からは、大変満足いただいたことがアンケートから伺え、今後のテーマ希望など、様々なご意見をいただきました。今後もより充実した内容の講座を提供できるよう努めてまいります。

2024年度オープンキャンパス

2024年度オープンキャンパスは2024年8月8日（木）にA 時間帯、B 時間帯の2 回にわたって行われました（表1）。全体説明会では、青山学科長の挨拶のあと、各コースの紹介があり、その後、各コースのブースに分かれて、実習等の体験、学生個別相談等が行われました。また、保護者向けに青山学科長による説明会も実施され、こちらも盛況でした。

オープンキャンパス参加者によるアンケート調査では、いずれの企画も好評でした。参加者数は表2のとおり、A 時間帯は170 名、B 時間帯は164 名の計334名が参加しました。

表 1 オープンキャンパス2024スケジュール

A時間帯（10：00～12：00）		B時間帯（13：00～15：00）	
9:30	受付開始	12:30	受付開始
10:00	開会（会場：第9講義室） 学科長による歓迎のあいさつ 各コースの紹介、特色入試、高専編入試験の紹介	13:00	開会（会場：第9講義室） 学科長による歓迎のあいさつ 各コースの紹介、特色入試、高専編入試験の紹介
10:30	相談コーナー ・各コースの相談、入試相談、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース （理学療法学講座、作業療法学講座） ・総合医療科学コース	13:30	相談コーナー ・各コースの相談、入試相談、学生受験相談 各コースの説明会、体験ブース ・先端看護科学コース ・先端リハビリテーション科学コース （理学療法学講座、作業療法学講座） ・総合医療科学コース
12:00	終了	15:00	終了

表 2 オープンキャンパス 2024 参加者状況

●参加者数 ※定員400名（A時間帯：200名、B時間帯：200名）

	高 1			高 2			高 3			既卒生			その他			参加者数		
	女子	男子	未選択	女子	男子	未選択	女子	男子	未選択	女子	男子	未選択	女子	男子	未選択	女子	男子	未選択
A時間帯	36	14	0	66	12	1	17	14	0	4	1	0	2	0	3	125	41	4
B時間帯	28	18	0	53	30	0	19	6	1	4	1	0	1	0	3	105	55	4
計	64	32	0	119	42	1	36	20	1	8	2	0	3	0	6	230	96	8
	96			162			57			10			9			334		

博士授与者と論文題目

浅瀬 万里子

論文題目：Impact of Different Therapeutic Strategies With Left Ventricular Assist Devices on Health-Related Quality of Life During Prolonged Device-Based Support
(左室補助人工心臓による治療戦略が、長期補助期間中の健康関連Quality of Lifeへ与える影響)

市原 香織

論文題目：Nursing care for spiritual pain in terminal cancer patients: A non-randomized controlled trial
(終末期がん患者のスピリチュアルペインに対する看護ケア：非ランダム化比較試験)

NIU QIAN

論文題目：The Effect of Fear of Infection and Sufficient Vaccine Reservation Information on Rapid COVID-19 Vaccination in Japan: Evidence From a Retrospective Twitter Analysis
(日本におけるCOVID-19ワクチンの迅速な接種における感染への恐怖とワクチン予約情報の影響：ツイッター分析による実証研究)

松本 杏美莉

論文題目：Attentional focus differentially modulates the corticospinal and intracortical excitability during dynamic and static exercise
(注意の焦点化が動的・静的運動中の皮質脊髄路および皮質内神経回路の興奮性に与える影響について)

田中 浩基

論文題目：Variability factors of physical activity and its preventive role against muscle quality loss in the acute phase of stroke
(脳卒中後急性期における身体活動の変動要因および筋質低下に対する予防的役割について)

中原 峻

論文題目：Development of a novel model for intraarticular adhesion in rat knee joint
(ラット膝関節における新規癒着モデルの開発)

中西 加代子

論文題目：Label-free cell detection of acute leukemia using ghost cytometry
(ゴーストサイトメトリーを用いたラベルフリー白血病細胞の検出技術)

SAIZONOU OMOLOTO MARIE ANGE JOELLE

論文題目：Epithelial development of the urinary collecting system in the human embryo
(ヒト胚における尿収集系の上皮形成)

片寄 亮

論文題目：Association between self-reported weight loss and new long-term care insurance certifications: A 9-year Japanese older adult cohort study
(自己申告による体重減少と新規介護認定との関連：日本人高齢者における9年間のコホート研究)

小清水 宏

論文題目：Prediction of blood pressure variability using deep neural networks
(深層ニューラルネットワークを用いた血圧変動性の予測)

趙 梓汐

論文題目：Analysis of Molecular Changes and Features in Rat Knee Osteoarthritis Cartilage: Progress From Cellular Changes to Structural Damage
(ラットの変形性膝関節症軟骨における分子変化と特徴の分析：細胞変化から構造的損傷へ)

吉岡 クレモンズ紀穂

論文題目：Cell transplantation-mediated dystrophin supplementation efficacy in Duchenne muscular dystrophy mouse motor function improvement demonstrated by enhanced skeletal muscle fatigue tolerance
(細胞移植によるジストロフィンの補充は、デュシェンヌ型筋ジストロフィーマウスの運動機能改善に有効であり、特に筋疲労耐性を改善する)

王 紫敏

論文題目：Effects of High-Velocity Versus Low-Velocity Resistance Training on Muscle Echo Intensity in Healthy Young Women: A Randomized Controlled Trial
(健康若年女性における高スピードレジスタンストレーニングと低スピードレジスタンストレーニングが筋輝度に与える効果の比較：ランダム化比較試験)

清水 博己

論文題目：Differences in gait parameters between supervised laboratory and unsupervised daily assessments of healthy adults measured with an in-shoe motion sensor system
(靴内モーションセンサーシステムによって計測された健康成人の監視下の実験施設内評価と非監視下の日常生活評価における歩行パラメータの差異)

徐 仕軒

論文題目：Repetitive magnetic stimulation prevents dorsal root ganglion neuron death and enhances nerve regeneration in a sciatic nerve injury rat model
(反復磁気刺激は坐骨神経損傷ラットモデルにおいて、後根神経節ニューロンの細胞死を防ぎ、神経再生を促進する)

大塚 日花里

論文題目：Associations Among Hypersensitivity, Vagal Tone, and Mood State in Adults
(成人における感覚過敏および迷走神経活動、気分状態の関連性)

下出 優

論文題目：Impact of stress coping style on self-care behaviors and prognosis in patients with heart failure: A prospective longitudinal observational study
(心不全患者のストレス対処行動が疾病管理及び予後に与える影響：前向き観察研究)



博士号を取得して

浅瀬 万里子

2024年5月に博士号を取得いたしました浅瀬万里子と申します。この度は、寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。私は、臨床で出会いました補助人工心臓を装着しながら心臓移植を待機する患者さんが、どのような思いで補助人工心臓と共に生きているのか、という研究疑問から大学院へ進学しました。

博士課程では、日本における補助人工心臓装着症例のデータベース（J-MACS）から治療戦略別、また経時的にQoLを調査しました。結果、どの治療戦略においても、補助人工心臓装着前に比較して装着後12か月までは患者のQoLは向上していることが分かりました。この結果は患者だけではなく、私含め補助人工心臓患者をケアする医療者にとっても希望となる結果であったと思います。

博士号を取得するまでの日々は長く、自分との闘いの連続でした。その間、指導教員である任和子教授始め、研究協力者の先生方のご指導によって、どんな困難な状況に置かれてもあきらめず、とにかくやり続けることが出来ました。このプロセスすべてが博士課程での最大の学びであり、自信となりました。最後になりましたが、ご指導を賜りました諸先生方、臨床現場の皆さま、任ゼミの皆さま、研究のきっかけをいただいた患者さんとそのご家族に、この場をお借りして心から御礼申し上げます。

博士号を取得して

市原 香織

令和6年5月に博士号を取得いたしました。市原香織と申します。この度は、寄稿の機会をいただき誠にありがとうございます。私は、がん看護専門看護師として緩和ケアをサブスペシャリティに臨床現場で活動しています。博士課程では、実臨床で課題と考えてきたがん患者のスピリチュアルペインに対するアセスメントとケアの評価に取り組ませていただきました。多施設の緩和ケア病棟に勤務する看護師にスピリチュアルケアのトレーニングを行い、終末期がん患者を対象に日常ケアのなかでスピリチュアルペインのアセスメントとケアを実施し、患者のスピリチュアルウェルビーイングに与える効果を評価しました。研究期間は、コロナ禍でもあり、多くの困難がありましたが、協力施設の看護師の皆様、患者様のご協力をいただき終えることができました。これまでの経験を活かし、より一層精進してまいります。最後になりますが、博士課程では、長年に渡りご指導を賜りました田村恵子先生、白井由紀先生、西山知佳先生、研究室の皆様、そして研究にご協力いただいた看護師の皆様、患者様に心より感謝申し上げます。



博士号を取得して

牛 茜

2024年5月に博士の学位を取得しました牛茜と申します。このような貴重な寄稿の機会を賜り、心より感謝申し上げます。

博士後期課程では、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のワクチン接種をテーマに研究に取り組んでまいりました。日本では、世界的に見てワクチンへの信頼度が比較的低いとされながらも、実際の接種率は急速に上昇するという特異な状況が見られました。この背景にある社会的要因を解明したいという思いから、本研究に着手いたしました。

研究では、ソーシャルメディア上の膨大な日本語の投稿データを対象とし、自然言語処理と機械学習技術を用いて人々の意見を詳細に分析しました。その結果、ワクチン接種を促進した主たる要因は、「感染することへの恐怖心」と、「予約や接種会場に関する実用的な情報が効果的に伝達されたこと」であることを突き止めました。この発見は、公衆衛生分野における情報伝達戦略のあり方に新たな視座を提供するものと考えております。

本研究を遂行するにあたり、青山先生と谷間先生には、研究の着想から論文完成に至るまで、終始熱心なご指導と温かい励ましを賜りました。この場を借りて心より御礼申し上げます。また、研究室の皆様をはじめ、ご協力くださったすべての方々に支えられ、無事に学位を取得することができました。

博士課程で得た知見と経験を礎とし、今後も医療AIの発展に貢献できるよう、一層研究に邁進する所存です。改めて、これまでお力添えをいただいた皆様に深く感謝申し上げます。



博士号を取得して

松本 杏美莉

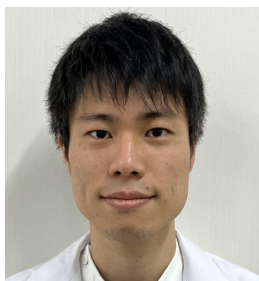
2024年7月に博士号を取得いたしました松本杏美莉と申します。このたびは寄稿の機会を賜り、心より御礼申し上げます。

私は学部卒業後、大学院修士課程・博士後期課程へと進学し、病気やけがによって損なわれた運動機能の回復を効果的に促すリハビリテーション法の確立を目指して研究を進めてまいりました。特に「注意の焦点化」と呼ばれる概念に着目し、神経生理学的手法を用いてその中枢神経機構の解明に取り組みました。

また、修士課程からはメディカルイノベーション大学院プログラムに参加させていただき、異分野との共同研究やサンディエゴでの海外派遣プログラムなど、貴重な経験を数多く得ることができました。さらに、作業療法士として京都大学医学部附属病院リハビリテーション部にて臨床経験を積むことができ、研究と臨床の両面から物事を見る視点を養うことができたと感じております。

研究者としては未熟ではありますが、京都大学で培った学びと経験を礎に、今後も教育・研究活動に一層励んでまいります。

最後になりましたが、これまで温かくご指導くださいました梁楠先生をはじめ、研究室の皆様、そして研究にご協力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。



博士号を取得して

田中 浩基

2024年9月に博士号を取得しました田中浩基と申します。この度は寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

大学院で過ごした期間は研究だけでなく結婚・子育てといったプライベートやコロナ流行という社会情勢にも影響され、間違いなく人生のターニングポイントであったと感じています。「20代の努力は一生もの」という格言を胸に毎日少しずつでも前に進めるよう努力を重ねました。結果的には学位取得に5年半の歳月がかかってしまいましたが、多くの方々に支えられ、濃厚な経験に満ち溢れた充実した日々を過ごせたと思います。研究者としてスタートラインに立ったばかりではありますが、大学院で得た経験を糧に周囲のスタッフを牽引できる理学療法士になれるようこれからも精進して参ります。

研究にご協力いただきました患者様をはじめ、京都大学医学部附属病院 脳神経外科・脳神経内科・疾患栄養治療部の皆様、そしてリハビリテーション部の同僚に敬意を表します。また、長きにわたり研究の基礎と研究者としての心得を教えていただいた市橋則明教授にこの場をお借りして御礼申し上げます。



博士号を取得して

中原 峻

2024年9月に博士号を取得いたしました中原峻と申します。このたびは、寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

博士課程では、黒木裕士先生および青山朋樹先生のご指導のもと、外傷後の関節内癒着に対する低出力超音波パルス刺激の効果検証に取り組んでまいりました。研究活動を通じて、評価法の確立や組織学的な解析、そして新たな治療可能性の探索など、多角的な視点で課題に向き合う経験を積むことができました。研究の過程では、専門領域やバックグラウンドの異なる研究者や臨床家の方々と意見を交わす機会に恵まれ、さまざまな視点や研究の進め方に触れることで、自らの視野が大きく広がったと実感しております。特に印象深かったのは、工学・臨床・基礎医学の専門家が密に連携し、介入法的设计から評価、解析に至るまでを一体的に議論・実践されていた点です。その柔軟かつ実践的なアプローチから、多くの学びを得ることができました。

現在は、米国ワシントン大学にてPostdoctoral Research Fellowとして研究に従事しております。京都大学での学びを大切に、分野横断的な共同研究や知見の共有を通じて、自分の研究領域に閉じることなく、社会的・臨牀的に意義のある研究に励んでいきたいと考えております。

最後になりますが、これまでご指導いただいた先生方、研究室メンバーの皆様、そして研究にご協力いただいたすべての皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。



博士号を取得して

中西 加代子

令和6年9月に博士号を取得いたしました中西加代子と申します。このたび、寄稿の機会をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

私は入学以前、京都大学医学部附属病院検査部にて臨床検査技師として勤務しており、主に血液検査を担当してまいりました。平成25年には一級臨床検査士（血液学）の資格を取得し、業務を通して得られる臨床知見と、最新の技術を活用した研究の重要性を日々感じておりました。その中で、血液検査分野における高度な専門知識を体系的に深め、実臨床と研究の橋渡しができる人材になりたいとの思いから、博士課程への進学を志しました。

進学に際しては、足立壮一教授より多大なるご指導とご助言をいただき、AI駆動型細胞形態ソーティング技術を活用した白血病細胞の検出に関する研究に取り組む機会を得ました。本研究は、シンクサイト株式会社との共同研究として進められ、臨床現場での実用化を視野に入れた、先端のかつ実践的な内容となりました。

研究を進める中で、松尾英将先生には日々の研究設計や技術的な側面について丁寧なご指導を、平松英文先生にはデータ解析や論文作成に至るまで、粘り強くご指導を賜りました。また、学位審査では錦織桃子教授より温かくも厳しいご指導をいただき、研究成果をより高める貴重な機会となりました。

多くの先生方や共同研究先の皆様のお力添えにより、学位取得という大きな節目を迎えることができました。この経験は、私にとって大きな財産であり、今後の臨床・教育・研究活動の礎となるものです。現在は、滋賀医科大学医学部附属病院検査部にて臨床検査技師長として勤務しております。今後も、これまでご指導くださった方々への感謝の気持ちを胸に、より良い医療と臨床検査の発展に貢献できるよう、努力を続けてまいります。



博士号を取得して

Saizonou, Omoloto Marie Ange Joelle

I am Dr Marie-Ange Saizonou from the Republic of Benin (West Africa). I obtained my PhD in December 2024 in the Laboratory of Pathology under the supervision of Professor Takakuwa Tetsuya. I am honored to contribute to this section of Kyoto University Human Health Science Department's newsletter.

After graduating in General Medicine from the Faculty of Health Science (Cotonou, Republic of Benin), I practiced for a while as a General Physicist, notably at St Luc Hospital, Dahin Clinic and the National Police Health Center (Republic of Benin). However, I was more interested in obtaining a PhD, which would allow me to expand my knowledge and acquire new qualifications.

At that time, my husband was in Japan to complete his PhD, and I had the opportunity to move to Japan with him. As I am passionate about Histopathology, I decided to pursue my PhD in Japan and began looking for appropriate laboratories at Kyoto University. This is where I found Professor Takakuwa's laboratory and I was immediately excited about starting this new adventure. In 2020, I then contacted Professor Takakuwa who accepted me as PhD student in his Laboratory. I started a 3-years PhD, during which I applied for scholarship opportunities from the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (Monbukagakusho, MEXT, Japan) and I was successful to obtain it thanks to Professor Takakuwa guidance.

Additionally, I obtained research grants as a Kyoto University Graduate Division Fellow and I further joined the graduate program of Medical Innovation (MIP), which aims to train outstanding researchers who take the lead in cutting-edge research and development, to enable the dissemination of medical and healthcare innovation from Japan. I am always grateful to these opportunities which allowed me to complete my studies without trouble.

The PhD topic was about investigating the epithelial development of the urinary collecting system, using human embryos collection from the Congenital Anomaly Research Center, Kyoto University Graduate School of Medicine, Japan.

Digitalization was made by using respectively Olympus virtual slide, system (VS120-S5-J, Olympus Corp., Tokyo, Japan) for histological observations and reconstruction and analyzing using Amira v. 5.5.0 (Visage Imaging GmbH, Berlin, Germany).

Throughout my studies, Professor Takakuwa guided me with patience from the basic writing style of scientific papers to the necessary background and knowledge needed to complete a thesis. Under his guidance, my research paper has been accepted, and I successfully defended my thesis. I plan for future plan to work in an academia institution.

Once again, I would like to express my sincere gratitude to Professor Takakuwa for his guidance and support, as well as to all members of the Laboratory of Pathology, Dr Kanahashi Toru, MIP doctors and all administrative staff. My gratitude also goes to my MIP mentor, Dr Chikako Saotome, for all her advice and guidance in the MIP program. I also wish to thank the Congenital Anomaly Research Center, Kyoto University and Professor Shigehito Yamada for providing humans embryos data for the purpose of my studies. To finish, it was a great experience doing my PhD in the Department of Human Health Sciences, Kyoto University, and I would recommend motivated students to pursue their advanced studies, without hesitation.



博士号を取得して

片寄 亮

2025年3月に博士の学位を取得いたしました片寄亮と申します。このたびは寄稿の機会を賜り、心より御礼申し上げます。

博士後期課程における主たる研究課題は、認知機能低下予防を軸とした介護予防に向けた生理学的変化を検証することでした。当初は、新たな地域フィールドで調査を立ち上げて実施する予定でしたが、COVID-19の影響により研究活動は困難を極めました。

一方で、私は2013年より継続して兵庫県香美町をフィールドとするコホート研究に携わっており、地域住民のフレイルおよび介護予防を目的に、どのような生活習慣やこういった特性がリスク因子や予防因子として作用するかについて検討を重ねてきました。博士論文は、対象集団や主解析テーマこそ異なりますが、こうした研究活動の積み重ねを基盤として執筆に至ったものです。現在は、介護予防に資する生理学的変化の解明に取り組んでおり、フレイル予防・介護予防の観点から、科学的根拠の創出に一層尽力して参りたいと考えております。

最後になりますが、本研究にご協力くださいました参加者の皆様、調査を支援いただいた香美町役場の職員の皆様、そして長年にわたりご指導くださいました木下彩栄先生、ならびに共同研究者の先生方に心より深謝申し上げます。

博士号を取得して

小清水 宏

2025年3月、博士号を取得いたしました小清水宏と申します。この度は寄稿の機会を賜り、厚く御礼申し上げます。

個人の健康管理が重要視される現代において、私は生体センシングデバイスを製造するメーカーに所属しながら、家庭で日々測定される膨大なバイタルデータと健康状態の新たな関連を探るべく、社会人博士として進学しました。そのデータの解析は「やってみないとわからない」探索的な側面もありましたが、一見無関係に思えるデータから新たな関連性を見出した時は、研究の面白さを実感しました。

業務との両立など困難もありましたが、企業とアカデミア、双方の視点に触れたからこそ、研究成果を社会に実装する意義を深く考える貴重な機会となりました。この貴重な学びが得られたのも、指導教員の奥野恭史先生、そして研究室の皆様の温かいご支援の賜物であり、深く感謝申し上げます。

研究では「深層ニューラルネットワークを用いた血圧変動性の予測」を主なテーマとして、デジタルバイオマーカー開発に注力しました。今後は、本研究で得た技術を活用して、一人ひとりの生活に寄り添う疾患予防・健康管理に貢献できる製品を実現します。学術的な知見と企業の強みを融合させ、価値ある社会実装を実現できるよう、一層精進してまいります。

博士号を取得して

趙 梓汐

2025年3月に博士号を取得いたしました趙梓汐と申します。この度は、寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

先進的な科学を学ぶべく日本に留学し、京都大学において修士課程・博士課程の教育を受けました。博士課程では、骨性関節症の「超早期」メカニズムの解明と、それに基づいた予防戦略の開発に取り組みました。黒木先生、青山先生、伊藤先生のご指導のもと、再生医学を基盤とする研究室において、疾患が顕在化する以前の微細な分子・細胞レベルの変化を特定する研究に従事しました。この過程では、特定のバイオマーカーや早期介入の可能性についての知見を得るとともに、その成果を予防プログラムの基盤構築に活用しました。現在も関連する研究プロジェクトを通じて、骨性関節症の早期発見・予防技術の実用化を目指し、研究を継続しています。この地で培った知識と経験を糧に、今後も研究の発展に尽力してまいります。

研究の全ての過程において、温かく力強いご指導を賜りました恩師である黒木裕士先生、青山朋樹先生、伊藤明良先生、共に切磋琢磨した研究室の皆様、そして本研究にご協力・ご支援くださいました全ての方々に、深く感謝の意を表します。また、このかけがえのない学びの機会を与えてくれた日本の科学環境と、留学を支えてくれた全ての人々にも心より御礼申し上げます。



博士課程を振り返って

吉岡 クレモンズ紀穂

As a physical therapist of French-Japanese origin living in Paris, I first sought to gain clinical experience in private practice after graduation. While taking part in international healthcare activities to strengthen the ties between my two home countries, I had the pleasure of meeting Pr. Tomoki Aoyama, as well as Nana Takenaka (former member of Sakurai lab, Center for iPS cell Research and Application; CiRA), who would later become my research mentors. I seize this opportunity to thank them, as they were among the first to raise my awareness and interest in the advances made by Japanese universities in physical therapy research, which is still limited in the clinical practice-oriented studies of the profession in France.

Moving to Japan to join Aoyama lab from 2019 to 2025, I concurrently integrated Sakurai lab in the department of Clinical Application of CiRA to conduct collaborative research and develop the emerging and fascinating field of regenerative rehabilitation. There, the high potential of cell transplantation to treat the still incurable Duchenne muscular dystrophy (DMD) was being confirmed at the molecular level in mice models. Through my physical therapist background, I focused on further demonstrating its efficacy on DMD motor functions. By establishing novel evaluation methods to accurately assess DMD mouse muscle functions during the Master course, I succeeded in confirming the amelioration of DMD muscle fatigue tolerance through cell therapy and in clarifying the underlying biomolecular mechanisms during the Doctoral program.

As I enjoy adding more strings to my bow and making the most of my past experiences, I felt to have found the perfect place to help build bridges between clinical practice and research, but also between basic and clinical research, and between regenerative medicine and rehabilitation. My experience in Kyoto University also provided me with the opportunity to manage projects and present my work in Japanese, English and French languages, in line with my wish to promote international knowledge-sharing in physical therapy. In closing, I would like to express my sincere gratitude to Pr. Tomoki Aoyama, Assoc. Pr. Hidetoshi Sakurai and researcher Nana Takenaka for the continuous support and trust they have shown me during these six years of study at their side. With plenty of new doors open to me, I shall now keep moving forward, in the hope to cross paths with them again one day.



博士号を取得して

王 紫敏

2025年3月に博士号を取得いたしました王紫敏と申します。この度は、寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

博士課程では、筋質に着目し、筋質が筋力に与える影響のメカニズムや、筋質を効果的に改善する方法の開発に関する研究に取り組んでまいりました。慣れない言語環境での研究に加え、研究に対する体系的な知識が十分でなかった私にとって、指導教員の下で、研究計画の立て方や統計的思考法、論文執筆の進め方など、実践的なスキルを身につける貴重な機会となりました。特に、根拠に基づく議論の重要性を学び、研究者としての姿勢が大きく変わったと実感しております。ディスカッションやプレ実験を重ねるなかで、多くの方々からご助言やご協力も賜り、そのおかげで最終的に成果を上げ、学位取得へとつなげることができました。

また、博士課程の期間中には、自身の研究に打ち込むとともに、優れた教育者としての在り方を間近で学ぶ貴重な機会にも恵まれました。研究に対して十分な自由を与えていただきながらも、常に前向きなご指導を頂戴し、多くの学びと気づきを得ることができました。これまでの経験や学びを大切にし、今後も研究者・教育者として一歩ずつ成長を重ね、次世代に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

最後になりますが、長きにわたりご指導くださいました市橋先生、谷口先生をはじめ、臨床バイオメカニクス研究室の先生方およびゼミ生の皆様に、この場をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。



博士号を取得して

清水 博己

2025年3月に博士号を取得いたしました清水博己と申します。この度は、このような寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

私は、理学療法士として地域の高齢者を対象とした訪問リハビリテーションに従事する一方で、大学院にて研究に取り組んでまいりました。臨床現場で働く中で、日常生活の環境が患者に与える影響の大きさを感じ、「実生活の中から正確に評価したい」という思いが研究の出発点となりました。そのため、博士課程では、日常生活下における歩行の変化や身体機能との関連を慣性センサなどのウェアラブルデバイスを用いて解析する研究を行いました。歩く速さ、足の動きなどを分析しながら研究を進めていく中で、研究とはまさに一步一步の積み重ねであると痛感しました。

博士課程を通して、社会実装を目指した企業との協働、海外の研究者との交流や議論、国際学会での発表など、貴重な経験を積むことができました。これらを通じて、魅力的なプロジェクトを生み出すうえで「何をするか」も重要ですが、それと同じくらいに「誰と取り組むか」も重要であることを強く実感しました。これまで関わってくださった全ての方々に、改めて心より感謝申し上げます。

現在は、IT企業のヘルスケア関連の研究所にて、医療・リハビリテーション分野におけるAI技術の活用やデジタルヘルスの開発に携わっています。今後も、臨床現場と研究の橋渡しを意識しながら、誰もが安心して医療やリハビリテーションを受けられる社会の実現に貢献してまいります。



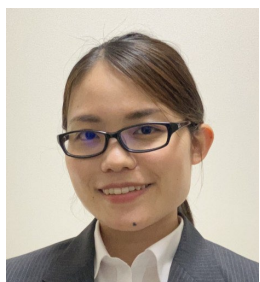
博士号を取得して

徐 仕軒

令和6年3月に博士号を取得いたしました徐 仕軒と申します。中国からの留学生として日本で学ぶ機会に恵まれ、この度、広報に寄稿させていただくこととなり、心より感謝申し上げます。

私は中国医科大学を卒業後、神経再生研究への情熱から2017年来日し、2018年より京都大学大学院医学研究科人間健康科学系に研究生として所属、のちに修士課程を修了しました。修士課程では坐骨神経損傷モデルを用い、超音波刺激による神経再生促進効果を探究し、臨床での機能回復の限界を痛感したことから、より効果的な非侵襲的治療法を求めて博士課程へ進学しました。博士課程では反復磁気刺激を用いた神経保護・再生促進の可能性を追究し、動物実験と分子生物学的解析を通じて試行錯誤を重ねる中で、課題に向き合い乗り越える力を培いました。多くの方々の支えなくして、この過程を完遂することはできなかったと実感しております。

最後になりますが、これまでの院生生活は、修士課程でご指導いただいた黒木先生、博士課程で温かく見守ってくださった青山先生、そして日々実践的なご指導を賜った伊藤先生をはじめ、人間健康科学系専攻の先生方や研究室の皆様、共同研究にご協力いただいた方々の支えがあってこそのものでした。この場をお借りして、心より深く感謝申し上げます。



博士号を取得して

大塚 日花里

2025年3月に博士号を取得いたしました大塚日花里と申します。この度は寄稿の機会を賜り、誠にありがとうございます。

私は京都大学医学部人間健康科学科を卒業後、大学院へ進学し、博士課程では稲富宏之先生および入江啓輔先生のご指導の下、感覚過敏を有する人々の自律神経活動の特徴や、感覚刺激を取り入れたリラクゼーション法の有効性の検証に取り組んでまいりました。

先生方は、時には私の決断を後押しし、また時には対等な立場で幾度となく議論を重ねてくださいました。また、他の研究テーマや他機関の先生方と関わる機会にも恵まれ、多様な知見を取り入れながら試行錯誤を重ねる過程は大変刺激的でした。元来内向的な性格ではありますが、このような温かくも刺激に満ちた環境の中で経験を積むにつれ、他の研究者の方々との交流や失敗を恐れず研究に取り組むことの面白さを実感するようになりました。研究者としてだけでなく、人としても大きく成長させていただいた3年間であったと感じております。

学位記を手にした今、学部時代から憧れていた研究者の先生方と同じフィールドに立てたことに大きな喜びを感じるとともに、研究者としてのスタートラインに立ったのだと身の引き締まる思いです。現在は日本学術振興会特別研究員として本学で研究を継続しながら、大学附属病院や地域の介護施設にて作業療法士としての研鑽を積み日々を送っております。博士課程や臨床で得た経験を糧に、微力ながらも人々の健康に貢献できる成果を残していけるよう、今後も日々精進してまいります。

最後になりますが、丁寧なご指導を賜りました稲富宏之先生、入江啓輔先生をはじめ、人間健康科学系専攻の先生方、学生の皆様、職員の皆様、そして研究にご協力いただきましたすべての皆様に、心より御礼申し上げます。



博士号を取得して

下出 優

2025年3月に博士号を取得いたしました下出優と申します。この度は寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。

私が入学した2020年は、新型コロナウイルスの流行が始まった年で、入学式もなく、授業とゼミはすべてオンラインという異例のスタートでした。急性期病院でフルタイムで働きながら研究を進めており、感染拡大による制約や、指導教員との対面のやり取りが困難になるなど、計画通りに進まない不安や焦りを感じる日々がありました。

それでも、急性期の現場で「からだ」だけでなく「こころ」にも向き合う作業療法の意義を深く感じ、臨床で生まれた疑問から「心不全患者のストレス対処行動タイプが疾病管理および予後に与える影響」に関する観察研究に取り組みました。今後はこの知見を基に、心不全患者さんの生活とこころを支える新しい患者教育プログラムの開発を目指しています。

また私は、病院の中だけでなく、地域で暮らすすべての人々に作業療法の魅力を伝えていくこと、さらには、作業療法を通じて世界との架け橋となるような活動にも挑戦していきたいという夢を描いています。博士号の取得は、その夢に向かって羽ばたいていく自信を私に与えてくれました。もともと勉強が得意だったわけではなく、自分が京都大学で博士号を取得することになるとは思ってもいませんでしたが、この経験は、人生の選択肢を広げ、自分自身の可能性に気づかせてくれるものとなりました。

最後に、この場をお借りして、温かくご指導くださった稲富教授に、心より御礼申し上げます。

人間健康科学系専攻・人間健康科学科 令和7年度入学試験結果 及び 令和6年度修了・卒業者数

令和7年度 医学部人間健康科学科入学試験結果

コース・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース	特色	20	44	17	17
先端リハビリテーション科学コース (先端理学療法学講座)	特色	5	24	8	8
先端リハビリテーション科学コース (先端作業療法学講座)	特色	5	16	5	5
一 括	一般	70	293	77	77
合 計		100	377	107	107

令和7年度 医学部人間健康科学科（2年次学士入学・2年次高専編入学） 入学試験結果

コ ー ス	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース	10	11	0	0
先端リハビリテーション科学コース (先端理学療法学講座)	4	3	0	0
先端リハビリテーション科学コース (先端作業療法学講座)		1	1	1
総合医療科学コース	3	9	4	3
合 計	17	24	5	4

令和7年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）入学試験結果

コ ー ス	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース {専門看護師課程（内数）} 【高度実践助産学系（内数）】	70【10】	20[5] {2[2]} 【6[0]】	17[4] {1[1]} 【4[0]】	15[4] {1[1]} 【2[0]】
先端リハビリテーション科学コース (先端理学療法学講座)		25[0]	22[0]※	24[0]※
先端リハビリテーション科学コース (先端作業療法学講座)		4[0]	3[0]	3[0]
総合医療科学コース		41[0]	40[0]	36[0]
合 計	70	90	82	78

[]の数は、社会人特別選抜（内数）

※総合医療科学コースの専攻内協力研究室学生の受験者が入学時点で先端リハビリテーション科学コース（先端理学療法学講座）に異動したため、入学者数が合格者数を上回る

**令和7年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）
入学試験結果**

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
先端看護科学コース	25	8[0]	7[0]	7[0]
先端リハビリテーション科学コース （先端理学療法学講座）		3[0]	2[0]	2[0]
先端リハビリテーション科学コース （先端作業療法学講座）		2[0]	2[0]	2[0]
総合医療科学コース		9[1]	9[1]	8[1]
合 計	25	22	20	19

[]の数は、内部進学試験（内数）

令和6年度 医学部人間健康科学科卒業者数

コース・専攻	卒業者数
先端看護科学コース	28
先端リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	23
先端リハビリテーション科学コース （作業療法学講座・先端作業療法学講座）	8
総合医療科学コース	48
合 計	107

令和6年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

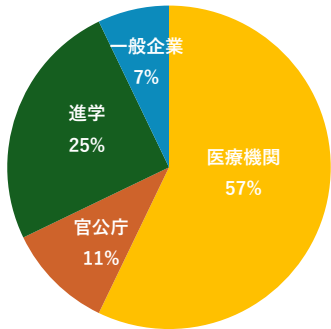
コース	修了者数
先端看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	19 【5】
先端リハビリテーション科学コース （先端理学療法学講座）	13
先端リハビリテーション科学コース （先端作業療法学講座）	3
総合医療科学コース	34
合 計	69

令和 6 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

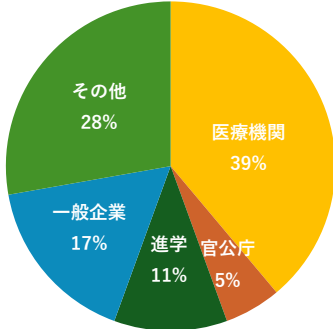
コ ー ス	修了者数
先端看護科学コース	0
看護科学コース	4
先端リハビリテーション科学コース（先端理学療法学講座）	6
リハビリテーション科学コース（理学療法学講座）	2
先端リハビリテーション科学コース（作業療法学講座）	2
リハビリテーション科学コース（作業療法学講座）	1
総合医療科学コース	1
検査技術科学コース	1
合 計	17

令和6年度（2025年3月）卒業・修了生の進路調査結果

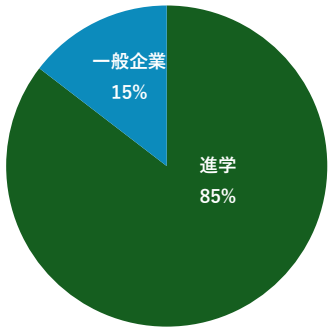
先端看護科学コース



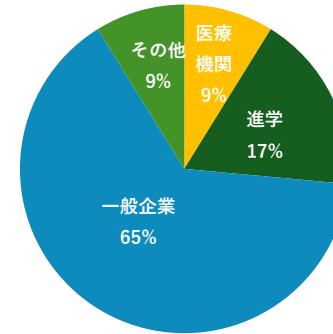
先端看護科学コース（修士課程）



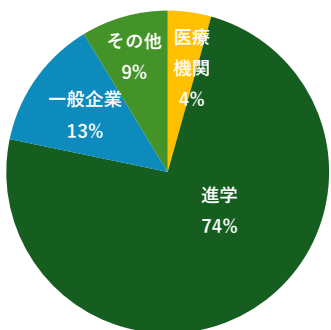
総合医療科学コース



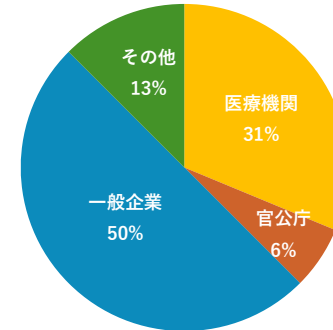
総合医療科学コース（修士課程）



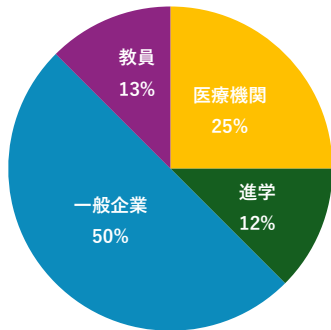
理学療法学講座



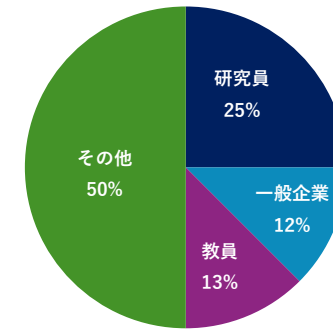
先端リハビリテーション科学コース



先端作業療法学講座・作業療法学講座



博士後期課程



人 事 異 動

異動年月日	職 種	氏 名	所 属	異動事由
令和6年6月1日	特定研究員	東 克暁	基礎系医療科学講座	採用
令和6年7月31日	助教	榛葉 旭恒	人間健康教育研究若手人材育成プロジェクト	任期満了
令和6年8月31日	特定助教	原田 陽平	大規模医学AI講座（富士通りサーチラボ）（産学共同）	辞職
令和6年9月30日	特定教授	益田 勝吉	食と健康科学研究講座（産学共同）	辞職
令和6年9月30日	特定准教授	荒木 望嗣	食と健康科学研究講座（産学共同）	辞職
令和6年9月30日	助教	近田 藍	先端基盤看護科学講座	辞職
令和6年9月30日	特定助教	稲葉 明彦	食と健康科学研究講座（産学共同）	辞職
令和6年9月30日	特定研究員	東 克暁	基礎系医療科学講座	辞職
令和6年10月1日	准教授	中川 直樹	基礎系医療科学講座	採用
令和6年10月1日	特定准教授	荒木 望嗣	先端基盤看護科学講座	採用
令和6年10月1日	助教	東 克暁	人間健康教育研究若手人材育成プロジェクト	採用
令和6年10月1日	助教	藤井 瀬菜	人間健康教育研究若手人材育成プロジェクト	採用
令和6年10月1日	助教	西中 瑤子	臨床系医療科学講座	配置換
令和6年11月1日	特定准教授	内野 詠一郎	先端基盤看護科学講座	昇任
令和6年11月1日	特定助教	山田 晶子	先端作業療法学講座	採用
令和6年12月1日	助教	櫻木 実	人間健康教育研究若手人材育成プロジェクト	採用
令和7年1月16日	助教	山内 洋子	先端中核看護科学講座	採用
令和7年3月31日	准教授	白井 由紀	先端中核看護科学講座	辞職
令和7年3月31日	講師	細川 陸也	先端広域看護科学講座	任期満了
令和7年3月31日	助教	平 和也	先端広域看護科学講座	任期満了
令和7年3月31日	特定助教	植田 彰彦	先端基盤看護科学講座	辞職
令和7年3月31日	特定助教	八木 優英	先端理学療法学講座	任期満了
令和7年3月31日	特定研究員	長谷川 亜樹	先端基盤看護科学講座	辞職
令和7年4月1日	教授	建内 宏重	先端理学療法学講座	昇任
令和7年4月1日	准教授	山下 正	先端広域看護科学講座	採用
令和7年4月1日	准教授	川島 啓嗣	先端作業療法学講座	昇任
令和7年4月1日	特定准教授	大塚 教雄	先端基盤看護科学講座	採用

人 事 異 動

異動年月日	職 種	氏 名	所 属	異動事由
令和7年4月1日	特定准教授	峰晴 陽平	健康医療D X 講座（産学共同）	採用
令和7年4月1日	講師	林 和寛	先端理学療法科学講座	昇任
令和7年4月1日	特定講師	梶谷 泰彦	健康医療D X 講座（産学共同）	採用
令和7年4月1日	助教	岩井 直子	先端広域看護科学講座	採用
令和7年4月1日	助教	初治 沙矢香	先端基盤看護科学講座	採用
令和7年4月1日	特定助教	前田 樹	大規模医学AI講座（富士通りサーチラボ）（産学共同）	採用
令和7年4月1日	特定研究員	長谷川 亜樹	先端基盤看護科学講座	採用
令和7年4月1日	特定職員	戸田 嘉子	臨床系医療科学講座	採用
令和7年4月30日	特定研究員	LOPEZ INIESTA, Maria Jose	健康医療D X 講座（産学共同）	任期満了
令和7年5月31日	助教	鳥井 美江	先端基盤看護科学講座	辞職
令和7年5月31日	助教	山之内 智子	先端中核看護科学講座	辞職

日 誌 (R6.4～R7.3)

4.2	学部2回生ガイダンス	9.5	病院協議会 教務・教育委員会
4.3	大学院新入生ガイダンス		研究紹介
4.4	病院協議会 教員会議		教員会議
	令和6年度人間健康新年度懇親会（五〇会）	9.12	臨時教授会 医学研究科将来計画検討委員会
4.5	学部入学式 大学院入学式		医学研究科会議・医学部教授会・医学教授会・ 医学系群会議
	学部新入生ガイダンス	9.13	2年次学士入学試験合格発表 大学院修士課程入学試験合格発表
4.11	医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議 教務・教育委員会	9.17	拡大執行部会議
4.15	拡大執行部会議	9.19	教授会・学系会議
4.18	教授会・学系会議	9.25	執行部会議
4.24	執行部会議	9.26	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議
4.25	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議		
5.2	病院協議会	10.3	病院協議会 教務・教育委員会
5.9	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議 教務・教育委員会		教員会議
	拡大執行部会議	10.10	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議
5.13	拡大執行部会議	10.15	拡大執行部会議
5.16	教授会	10.16	解剖体祭
5.18	大学院説明会[総合医療科学コース]	10.17	教授会・学系会議
5.22	執行部会議	10.23	執行部会議
5.23	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議	10.24	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議
5.25	大学院説明会[先端作業療法学講座] 大学院説明会[先端看護科学コース]		
6.5	学生厚生支援委員会	11.5	大学院博士後期課程入学試験
6.6	教務・教育委員会 病院協議会	11.7	病院協議会 教務・教育委員会
	研究紹介 教員会議		教員会議
6.8	大学院説明会[先端理学療法学講座]	11.12	過半数代表者選挙投票日 特色入試実施説明会
6.13	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議	11.14	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議
		11.16-17	特色入試第2次選考
6.17	拡大執行部会議	11.18	拡大執行部会議
6.18	創立記念日	11.20-23	11月祭
6.20	教授会・学系会議	11.21	教授会・学系会議
6.26	執行部会議	11.27	執行部会議
6.27	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議	11.28	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議 医学研究科会議
		11.29	博士後期課程入学試験合格発表
7.4	病院協議会 教務・教育委員会	12.5	病院協議会 教務・教育委員会
	教員会議 人間健康科学V説明会（オンライン）		教員会議
7.11	医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議	12.12	研究紹介 医学研究科将来計画検討委員会
7.16	拡大執行部会議		医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議
7.18	教授会・学系会議	12.16	拡大執行部会議
7.24	執行部会議	12.19	教授会・学系会議
7.25	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議	12.25	執行部会議
		12.26	医学研究科関係学系系長会議・専攻長会議
		12.28	京都大学医学教育ワークショップ (KUROME)
8.8	オープンキャンパス		
8.13-14	計画年休期間		
8.20	大学院修士課程入学試験		
8.23	2年次学士入学試験		

日 誌 (R6.4～R7.3)

1.7 1.9 1.14 1.16 1.18-19 1.22 1.23 2.6 2.7 2.12 2.13 2.17 2.20 2.25-26 2.27 2.28	病院協議会 教務・教育委員会 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学部教授会・医学教授会 医学系群会議 拡大執行部会議 教授会・学系会議 大学入学共通テスト 執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議 病院協議会 教務・教育委員会 教員会議 臨時教授会 特色入試合格発表 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議 教務・教育委員会 拡大執行部会議 FD講習会 教授会・学系会議 学部入試 執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学教授会・医学系群会議	3.6 3.7 3.10 3.13 3.17 3.20 3.21 3.24 3.26 3.27	病院協議会 教務・教育委員会 教員会議 研究紹介 臨時教授会 医学部教授会 学部入試合格発表 医学研究科将来計画検討委員会 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議 医学研究科会議・医学教授会・医学系群会議 拡大執行部会議 人間健康FD討論会 教授会・学系会議 修士・博士学位記授与、学部学位記授与 執行部会議 医学研究科関係学系長会議・専攻長会議
--	---	--	---

あとがき

本年も無事に広報をお届けすることができました。本誌では、本学科を取り巻く組織改革や人事異動を皆様に正確にお伝えするとともに、学位取得者の声や開催行事などもご紹介したいと思っております。今後ともお力添えの程、どうぞよろしくお願い致します。

(奥野 恭史)



<https://www.med.kyoto-u.ac.jp/>